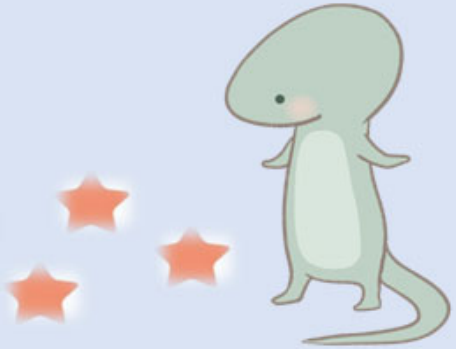
No376

アクティブラーニングの経験が大学卒業後の初期キャリアに及ぼす影響

目の前の課題から学生の目を未来に向けさせていく

小山理子先生
（桃山学院大学ビジネスデザイン学部教授）



溝上慎一の教育論（動画チャンネル） No376

アクティブラーニングの経験が大学卒業後の初期キャリアに及ぼす影響－目の前の課題から学生の目を未来に向けさせていく

小山理子先生（桃山学院大学ビジネスデザイン学部教授）

溝上　慎一　　Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

https://smizok.com/
E-mail　mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。
＊詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。
※公益財団法人電通育英会の研究委託を受けて行われています。
※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

（ご紹介）

小山理子
こやま　あやこ

桃山学院大学・ビジネスデザイン学部・教授

京都大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。京都光華女子大学短期大学部を経て2025年4月より現職。

共著『アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習』（東信堂，2016），共著論文『大学４年間の学びと成長が職場でのプロアクティブ行動に与える影響の検討』（日本教育工学会論文誌，2025 ），共著論文『キャリア意識とアクティブラーニング型授業における学習成果の関連―二つのライフと学業と職業の接続意識に注目して―』（キャリアデザイン研究，2022）など

2025年49巻2号
p.197-209

論　文

日本教育工学会論文誌 49(2)，197-209，2025

大学４年間の学びと成長が職場での プロアクティブ行動に与える影響の検討†

小山理子*1・河井　亨*2
京都光華女子大学短期大学部*1・立命館大学*2

大学から仕事・社会への移行（トランジション）を見据えた大学生の学びと成長の研究において，在学中の学びが結実した卒業時点の学習成果が，職場での能力発揮にどのような影響を与えるかは十分に明らかにされていない．そこで本研究では，大学４年間の学びと成長（主体的な学習態度，アクティブラーニング外化，ラーニング・ブリッジング，将来と日常の接続）が学習成果（大学生活充実度，学習成果）を介し，職場での能力発揮（プロアクティブ行動）に与える影響を明らかにすることを目的に，卒業時点と入社６か月目の２時点の縦断調査を行った．

共分散構造分析の結果，１）ラーニング・ブリッジング，将来と日常の接続は大学生活充実感につながるが，大学生活充実感はプロアクティブ行動にはつながらないこと，２）主体的な学習態度，アクティブラーニング外化，ラーニング・ブリッジング，将来と日常の接続は学習成果を介して，プロアクティブ行動につながることが明らかになった．

キーワード：大学教育，学校から仕事・社会への移行（トランジション），学習成果，アクティブラーニング，将来の見通し，ラーニング・ブリッジング，プロアクティブ行動

No369

（新著の紹介）

大学生の学びと成長

知識・他者・自分との関係から人生をつくる

河井亨先生（立命館大学スポーツ健康科学部准教授）

それではご覧ください

- 研究、著書、実践等の紹介
- 溝上との議論

大学４年間の学びと成長が職場でのプロアクティブ行動に与える影響の検討

2025年49巻2号
p.197-209

論　文

日本教育工学会論文誌 49(2)，197-209，2025

大学４年間の学びと成長が職場での プロアクティブ行動に与える影響の検討†

小山理子*1・河井　亨*2
京都光華女子大学短期大学部*1・立命館大学*2

大学から仕事・社会への移行（トランジション）を見据えた大学生の学びと成長の研究において，在学中の学びが結実した卒業時点の学習成果が，職場での能力発揮にどのような影響を与えるかは十分に明らかにされていない．そこで本研究では，大学４年間の学びと成長（主体的な学習態度，アクティブラーニング外化，ラーニング・ブリッジング，将来と日常の接続）が学習成果（大学生活充実度，学習成果）を介し，職場での能力発揮（プロアクティブ行動）に与える影響を明らかにすることを目的に，卒業時点と入社６か月目の２時点の縦断調査を行った．

共分散構造分析の結果，１）ラーニング・ブリッジング，将来と日常の接続は大学生活充実感につながるが，大学生活充実感はプロアクティブ行動にはつながらないこと，２）主体的な学習態度，アクティブラーニング外化，ラーニング・ブリッジング，将来と日常の接続は学習成果を介して，プロアクティブ行動につながることが明らかになった．

キーワード：大学教育，学校から仕事・社会への移行（トランジション），学習成果，アクティブラーニング，将来の見通し，ラーニング・ブリッジング，プロアクティブ行動

著者：小山理子，河井亨

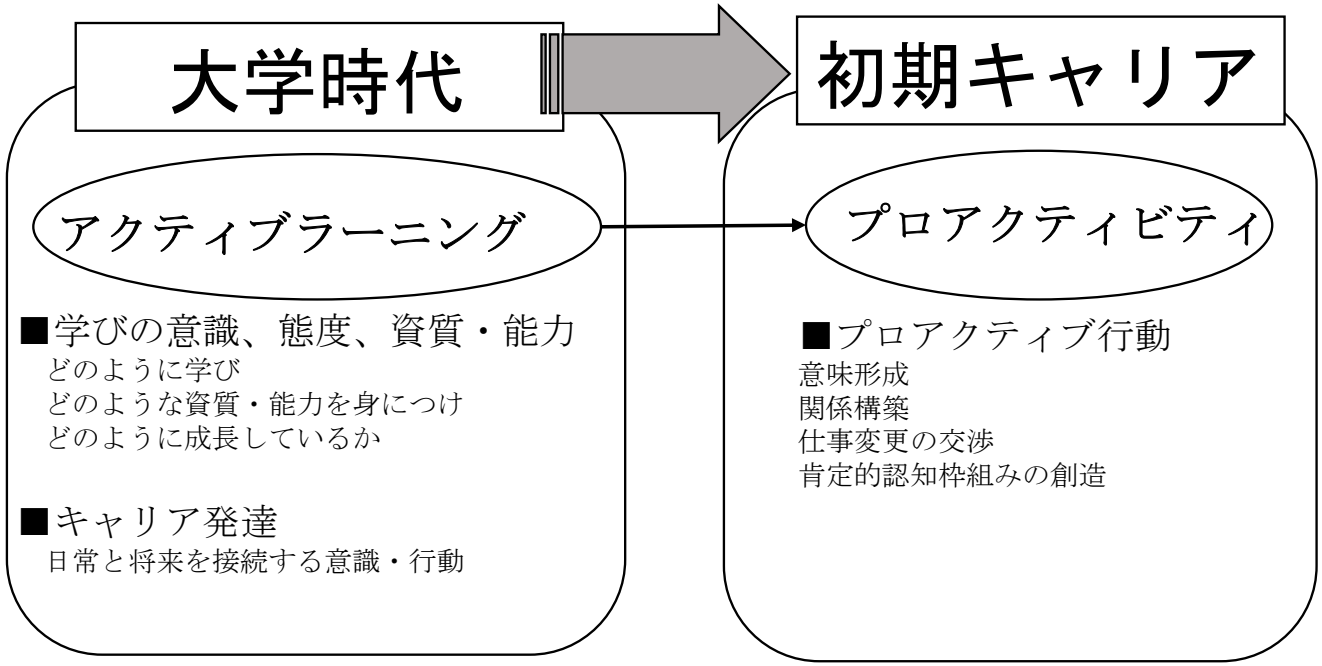
本日の内容

- 研究の背景
- 研究の目的
- 研究のポイント
- 結果の要約
- 教育実践への示唆

研究の背景

研究課題：22K13735（若手研究）

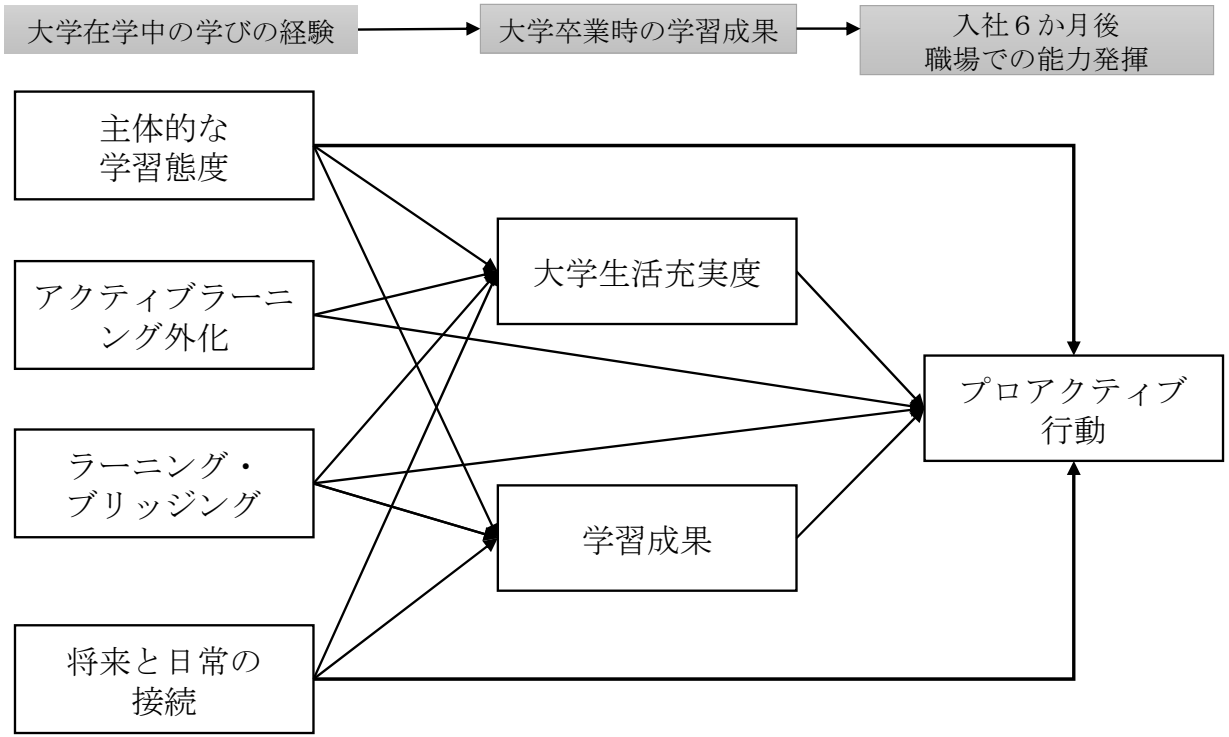
仕事・社会への移行でのプロアクティビティにつながる
アクティブラーニングの解明



大学時代と卒業後をつなげたデータ分析

研究の目的

大学時代の学びとキャリア意識が
４年間の総括的評価である卒業時点の学習成果を介し
トランジション後の職場での能力発揮にどのように影響するか？



研究のポイント①　研究の系譜

大学生の学びと成長研究

どんな学生が、学び成長しているのか？

・粘り強く主体的に正課の学びに取り組む
（主体的な学習態度）
・正課・課外を往還しながら学習を架橋する
（ラーニング・ブリッジング）
・将来に向けての力強いキャリア意識を持つ
（将来と日常の接続）

トランジション研究

大学での学びが、職場での適応や就職後の能力発揮にどのように影響しているのか？

・大学の教育と仕事（特に賃金）の関連
・大学時代の意識や経験と初期キャリアにおける能力の関連

大学生の学びの要因や大学での学びが就職後での能力発揮の関係について、
多様な変数を用いて、実証的に明らかにされてきた

	大学生の学びと成長についての研究			トランジションについての研究							本研究で採用する変数
				回顧的な調査研究				縦断調査研究			
	溝上 2018	小山・溝上 2020	小山・河井 2022	矢野 2009	矢野 2023	保田・溝上 2014	小山 2018	本田 2018	舘野ほか 2016	溝上 2023	
大学時代の変数	主体的な学習態度 アクティブラーニング外化 二つのライフ 資質・能力 成績	講義への取り組み方 アクティブラーニング外化 二つのライフ 資質・能力	主体的な学習態度 アクティブラーニング外化 ラーニング・ブリッジング 将来と日常の接続 資質・能力	学びの熱心度 卒業時の知識能力	大学での学び方 人間関係の形成 学業成績 能力 学生生活満足度 諸活動の役立度 諸活動の満足度	主体的な学習態度 二つのライフ 学生生活満足度	ラーニング・ブリッジング まじめ態度 不適応態度	レリバンス授業頻度 双方向授業頻度 ゼミ発表回数 大学時自己探究度 成績 柔軟スキル 専門スキル	大学生活充実度 参加型授業への参加 参加型授業への参加の影響度 授業外コミュニティの有無	主体的な学習態度 アクティブラーニング外化 授業外学習時間 二つのライフ 資質・能力 成績	主体的な学習態度 ラーニング・ブリッジング 将来と日常の接続 大学生活充実度 資質・能力
入社後の変数				知識能力 所得	就職と現在の仕事 現在の社会人力 現在の学習	組織社会化 能力向上 革新行動	大学教育の仕事活用度	仕事特性 情報スキル 判断スキル 交渉スキル	プロアクティブ行動	組織社会化 能力向上 資質・能力	プロアクティブ行動

研究のポイント①　研究の系譜

大学生の学びと成長研究

どんな学生が、学び成長しているのか？

・粘り強く主体的に正課の学びに取り組む
（主体的な学習態度）
・正課・課外を往還しながら学習を架橋する
（ラーニング・ブリッジング）
・将来に向けての力強いキャリア意識を持つ
（将来と日常の接続）

トランジション研究

大学での学びが、職場での適応や就職後の能力発揮にどのように影響しているのか？

・大学の教育と仕事（特に賃金）の関連
・大学時代の意識や経験と初期キャリアにおける能力の関連

大学生の学びの要因や大学での学びが就職後での能力発揮の関係について、
多様な変数を用いて、実証的に明らかにされてきた

・大学生の学びと成長についての研究により明らかにされてきた
要因が十分に考慮されていない
・大学卒業時点の総括的評価がデータが使用されていない

研究のポイント②　調査設計

大学４年間の学びと成長と職場での能力発揮の関連を確認するため

・在学中ではなく卒業時点で調査を行う
・２時点の縦断調査を行う
・学生の学びについての研究領域とトランジションについての研究領域を横断する変数を用いる

- １時点目

2023年3月
大学卒業前の就職が決まっている４年生
全国の国公立私立大学生　1,000人

→

- ２時点目

2023年10月
入社６ヶ月後
290名（男性89名，女性201名））

【使用した変数】

- 主体的な学習態度（畑野・溝上 2013）
- アクティブラーニング外化（溝上 ほか2016）
- ラーニング・ブリッジング（河井・溝上 2012）
- 将来と日常の接続（溝上・畑野 2013）
- 大学生活充実度（舘野ほか 2016）
- 資質・能力（他者理解力，コミュニケーション・リーダーシップ力，計画実行力，社会文化探究心）

（溝上 2018a，溝上 2018b，溝上 2023）

【使用した変数】

- プロアクティブ行動

（星 2016, 舘野ほか 2016，田中ほか 2021）

プロアクティブ行動について

定義

- 組織内の役割を引き受けるのに必要な社会的知識や技術を獲得しようとする**個人の主体的な行動全般**のこと（小川 2012）
- 現在の状況を改善し、新たな状況を創造するために**主体的に行動すること**であり、現状に対して受動的に適応するのではなく、**現状に挑戦すること**（Crant 2000）

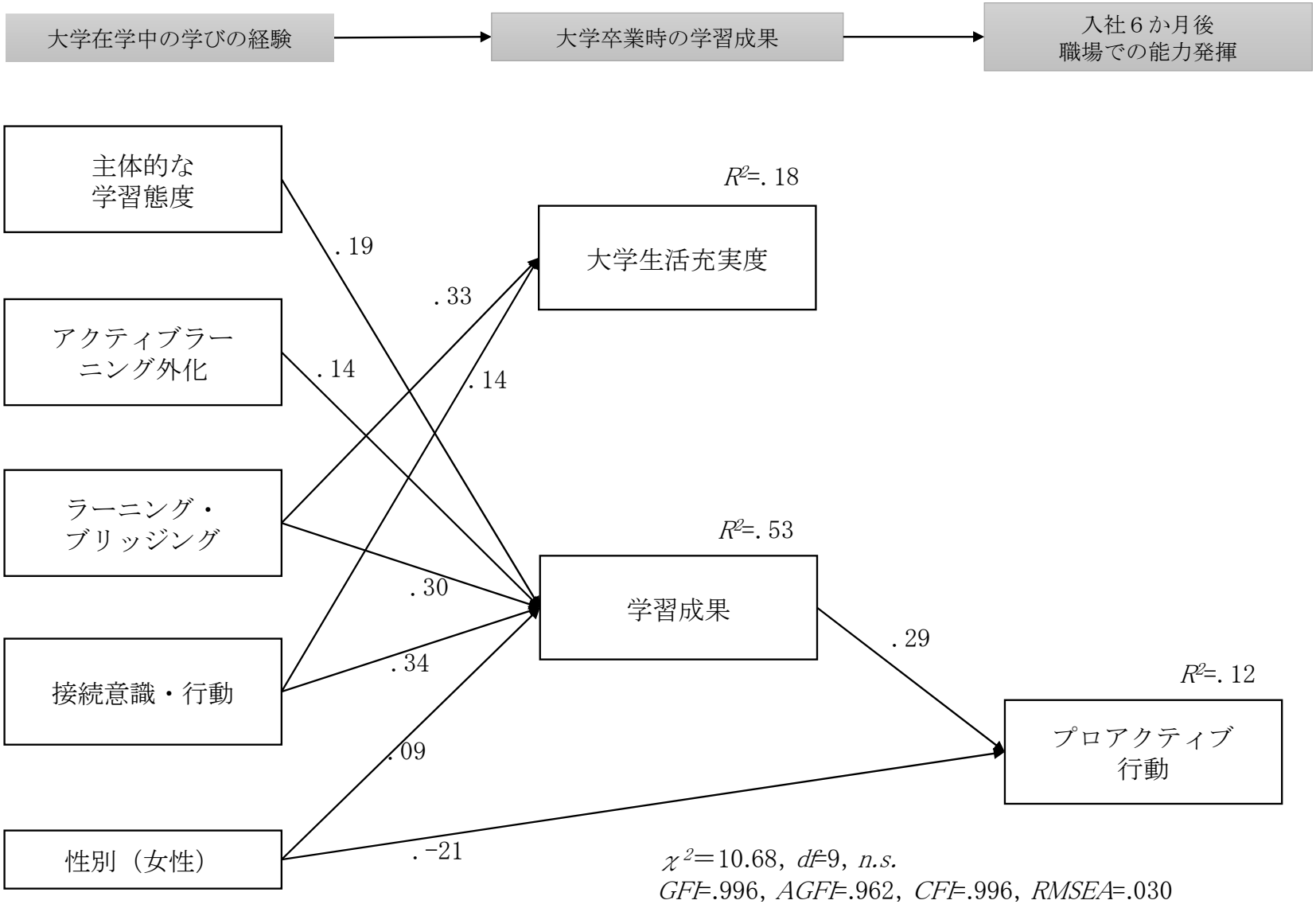
先行研究

- 大学生活が充実している学生は、就職後も主体的に環境に働きかける行動を行っている可能性がある（舘野ほか 2016）
- プロアクティブ動が職場での能力向上の促進要因になる（田中ほか 2021）

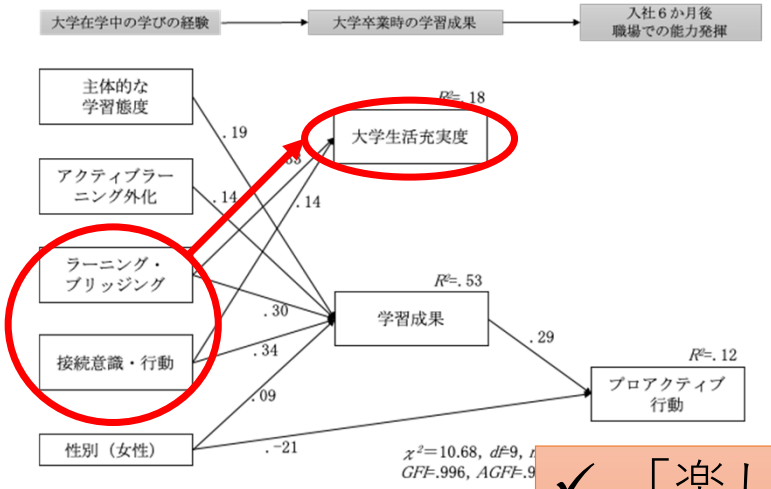
✓ 本研究では、学生時代の学びの経験と卒業時の学習成果、トランジション後の職場での主体的な行動の関係を明らかにしたい

✓ プロアクティブ行動は、トランジション後の主体的な行動をよく捉える変数であると考えた

分析結果


大学在学中の学びの経験
大学卒業時の学習成果
入社６か月後
職場での能力発揮
主体的な
学習態度
アクティブラー
ニング外化
ラーニング・
ブリッジング
接続意識・行動
性別（女性）
大学生活充実度
学習成果
プロアクティブ
行動
R2=. 18
R2=. 53
R2=. 12
. 19
. 33
. 14
. 14
. 30
. 34
. 09
. 29
. −21
χ2＝10.68，df=9，n.s.
GFI=.996，AGFI=.962，CFI=.996，RMSEA=.030

結果の要約

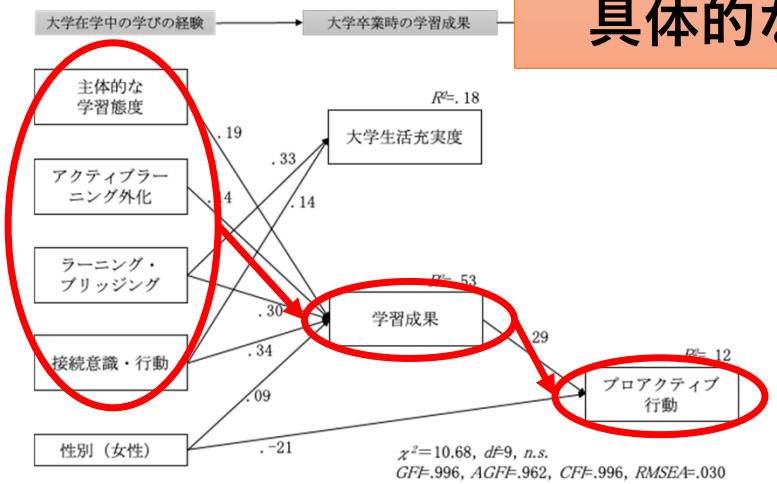


・ラーニング・ブリッジング、将来と日常の接続意識は、卒業時の大学生活充実感につながるが、大学生活充実感はプロアクティブ行動にはつながらない

↓

大学生活全般に対する感情的満足や生活面の充実は、職場での主体的な行動とは別の側面（友人関係や私生活の充実など）に影響する可能性

✓ 「楽しかった」だけでは、不十分
✓ 授業を通じて〇〇ができるようになったといった
具体的な成長の実感が重要



・主体的な学習態度、アクティブラーニング外化、ラーニング・ブリッジング、将来と日常の接続意識は、卒業時の学習成果を介して、プロアクティブ行動につながる

↓

学習課題への主体性、学びの往還を進める主体性、卒業時に将来と日常を接続する人生への主体性が学習成果に結実し、職場での主体的な行動に影響する可能性